



文化財指定と「担い手」の実践：二つの踊りの来歴をめぐって

著者	木原 弘恵
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	121
ページ	107-117
発行年	2015-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/13743

文化財指定と「担い手」の実践*

——二つの踊りの来歴をめぐって——

木 原 弘 恵**

1 地域伝統文化と担い手

国家の政策によって価値づけられた文化財や自然環境を地域活性化のために利用しようとする各地の取り組みは、今日めずらしくない光景となった。農山漁村を中心に地域社会をとりまく環境は、過疎化や少子高齢化といった現実をまねにして相応に厳しい。地域に固有の特質をもった文化や自然環境を国民文化の名のもとに統合しようとする制度に対しては、地域の人びとの選択を客体化するものとして批判が投げかけられてきた。しかし、地域社会で生業をたてる人びとは、こうした現実の中で、地域生活者としての錯綜した思いを抱えながら、彼らの生活の便宜に合わせ外部からの価値づけや制度を変形し、修正しながら実践を重ねてきた。

本稿では、地域の伝統文化としてとらえられてきた盆踊りをめぐって、それが無形民俗文化財として価値づけられるようになった経緯—「文化財化」をめぐる一連のプロセス—のなかで、地域の伝統文化としてとらえられてきた盆踊りが、地域社会でいかに再定位され、いかに継承されてきたのかを明らかにすることを目的とする。それは、法律にもとづく文化財の指定制度と実際の担い手である地域社会との関係に焦点をあてながら、均質化された制度空間の問題を当該地域の来歴や特質から捉えかえす試みでもある。

文化財保護法や国立公園制度のように、国家によって価値づけが行われる制度のもとでは、各々の地域文化や地域といった対象の持つ価値が評価

されて指定に至るのではなく、他の対象との比較によって指定が可能となる。こうした手法による価値づけは、ローカルな場とナショナルな秩序の統合としてもとらえられてきたため、これまでナショナリズム研究などを中心に数多くの研究蓄積がなされてきた。

無形民俗の文化財化が、その担い手である地域社会に対しどのような影響を及ぼしたのかを析出する研究は、とくに民俗学における研究分野を中心に展開されてきた。その議論の視角は、二つに大別することができる。一つは、文化財指定が外発的であるとし、制度のもつ政治性を批判的に問う研究である。もう一つは、文化財に指定された対象がその保存や継承をめぐっていかに主体性を発揮しようとしているのかに着目しようとする研究である。

才津祐美子（1996）は、1975年の文化財保護法の改正において、「無形民俗文化財」を対象にした指定制度の導入の背景について、民俗をそのままのかたちで保存することが「重要なこと」へと価値転換したと論じている。民俗文化財研究協議会の会報を分析した岩本通弥は、その「民俗文化財」というカテゴリーの創出過程について、文化財指定の根拠の曖昧さや価値づけや序列化のプロセスに隠れた権力性の存在を指摘する。この指摘は、「市町村の指定より、都道府県の指定を受けたものの方が価値が高く、それよりも国の指定の方がより高いといった、保護ではなく権威づけのシステムに、現在の民俗学は陥っているのではないか」（岩本 1998 a: 229）と、民俗学と文化財指定との関わり方に対し慎重な態度をうながす

*キーワード：コミュニティ、伝統文化、文化財

**関西学院大学大学院社会学研究科奨励研究員

ものであった。一方、長らく文化財行政に携わってきた大島暁雄は、本来は民俗文化財の価値はそれぞれの地域社会において等価値であることを前提に置きつつ、「行政行為として指定し保護を行うためには、優先順位を付けることが不可避」(大島 2006: 52)であると述べる。保存のために比較して価値づけるという行為には慎重でありながらも、政策上、こうした仕組みを担保する必要性のあることを説く。これらの議論はアプローチの手法に違いはあれども、文化財指定の持つ政治性に着目しながら、文化財化をめぐる諸問題について検討を試みた点においては共通している。

こうした法制度の政治性に言及する研究に対し、モノの遺存を総体的に把握しながら生活文化の変容とその実相をとらえた笹原亮二(1999)は、地域において文化財指定された伝統文化を担う人びとが、その保存や継承をめぐるどのような実践を営んでいるのかに焦点をあてる。笹原は、神奈川県相模原市域とその周辺において三匹獅子舞の調査を行うが、そこで一度は寂れてしまった獅子舞が文化財指定を受けたことで演者たちが獅子舞の文化的価値を再認識し、民俗文化の保存活動に積極的に取り組むようになった姿に出会う。そして、演者たちが、その価値を序列化した研究者の知見をも自らの民俗芸能を継続していくための実践に資する力として位置づけていることに目を向けた。こうした主体性の発露のあり方に着目する考察は、その主体性が過度に強調されかねない可能性も含んでいるように思われる。

伝統文化の担い手が直面している困難な状況を考えた時、文化財指定に対する過剰な政治性、あるいは指定を獲得する過程とその後の動きに対し必要以上に担い手の主体性に着目するだけではこぼれ落ちるものがあるのではないだろうか。厳しい生活環境のなかで生を営まざるをえない人間の多層性をいかにすくいあげることができるのか(古川・松田 2003)が、いま、同時に求められているように思われる。だからこそ、森田真也が析出した担い手たちの実践のように、「外部の権威を利用しながらもそれらに完全に巻き込まれずに

自らの価値基準を自分たちの側に保持しつづける態度」(森田 2007: 152-153)に目を向ける必要があるのではないだろうか。

本稿では、地域伝統文化の「文化財化」をめぐる制度と担い手との関係をとらえるにあたって、整理してきたような二つの立場からの検討の有効性を認めながらも、担い手たちの生活の場から切断と接合の関係を見ることの重要性を主張する森田の立場に依拠することにしたい。すなわち、無形民俗文化財に指定された地域伝統文化を継承する人びとの実践を生活の場から明らかにする。ただし生活の場からとらえ返そうとするにあたって、対象となる地域社会が、地域に固有な文化や自然環境を外部からの価値づけとどのように関わらせながらその来歴を形成してきたのかに注目することにしたい。

具体的には、岡山県笠岡市白石島という瀬戸内海離島を対象としながら、その島がいかに「交流」、「観光」という外部条件との切断と接合を繰り返しながら歩んできたのか。その履歴が地域の伝統文化である「島の盆踊り」の継承をめぐる人びとの実践にどのような影響をあたえてきたのか。つまり、外発的に与えられるさまざまな契機と内発的に持続させようとする契機との間でどのようにして折り合いをつけて来たのかを検討することを課題とする。

2 白石島と観光

本稿が考察の対象とする無形民俗文化財の継承地は、岡山県笠岡市白石島である¹⁾。白石島は、面積が2.9平方キロメートルの瀬戸内海に位置する離島であり、なかでも笠岡諸島に属している。2010年度の国勢調査によれば、人口は581人、世帯数300で住民の半数以上が65歳を超えている。

この島の盆踊りは、岡山県を代表する民俗芸能として紹介されることも多く、1930年頃に日本各地で盛んに開催された盆踊りの競演大会に出場し、好成績を収めたことで広く世に知られるよう

1) 1889年の町村制施行を経て白石島は小田郡神島外村に属することとなる。その後分村独立したものの、1955年に笠岡市と合併する(笠岡市史編さん室 1996)。

になった。現在白石踊と呼ばれるこの盆踊りは、1930年に日本青年館が主催した「郷土舞踊と民謡の会」(第5回)へ参加している。笹原は「郷土舞踊と民謡の会」と題した全国規模の芸能大会が誕生した背景について「当時、全国的に農村の荒廃が進行し、その立て直しを図ることが、青年団においても重要な課題とされ」、「農村を魅力のあるところとすべく娯楽の充実が叫ばれ、各地に伝わる盆踊りなどの芸能の活用が論議を呼んでいた」と言及する(笹原 1992: 48)。

踊りが島外に知られ、その価値が国民文化の統合過程に組み入れられようとし始めていた1920年代後半以降、白石島は、瀬戸内海国立公園への編入(1934年)、名勝指定(1943年)など、外からの評価によって価値づけられ、順序づけられることになった。1931年に国立公園法が制定され、1934年には、日本で初めての国立公園として、白石島を含む瀬戸内海が雲仙や霧島とともに指定された²⁾。内務省が国立公園の選定調査を開始して以降、国会議員提出の建議や国民による請願が数多く提出されていたことから、その効果に対する期待の大きさがうかがえる(西田 1999: 193)。外からの権威によって価値づけ、なにげない日常の風景を観光資源化することで地域の活性化を図ろうとするこうした動きは、観光産業によって直接的な利益を享受しようとする地元のみにとどまらず、旅行関係者にとっても重要であったといえる(白幡 1996: 59-62)。なかでも白石島に対しては、笠岡諸島やその近隣地域のなかでも観光地としての期待が大きかった。

白石島が国立公園の指定を受けた1934年、山陽新報社笠岡支局は、「海の国立公園を語る会」(本文中の漢字旧字体は新字体に変え、旧仮名遣いはそのまま掲載。以下同様)を開催した。この会には、笠岡署長、税務署長、駅長、笠岡諸島の各村長をはじめ、白石島からは郵便局長と寺の

住職などいわゆる地域の名士と呼ばれる人物が参加し、今後の国立公園の経営に関する議論が熱心に交わされた(小野・伊藤 2011: 426)。なかでも白石島の観光開発とその活性化に関する議論では、遊覧道路の設置や土産物開発³⁾や「島の盆踊り」⁴⁾などがテーマとしてとりあげられた。山陽新報社の記者による「あの盆踊りだけは白石島の名物として長く保存したい」との意見には、白石島の盆踊りを価値あるモノとしてとらえ、これをきっかけに利用しようとする視点を確認することができる。

折しも1920年代後半以降は、白石島の盆踊りが島外での上演を始めた時期であった。また白石踊のその後の展開は、価値づけられた踊りを「島から外へ」と単に一方的な流れだけでとらえることはできない。国立公園の指定をめぐる交わされた議論のなかからも推察されるように、踊りにつけられた価値を「外から島」へという方向の上でも展開されてきたものとして考えることができる。こうした相互形成的な関係を背後に、すなわち国立公園指定や名勝指定といった観光化による働きかけを受けながら、踊りは島において継承されてきたのである。

3 盆踊りの文化財指定

3-1 「白石踊」の生成

白石島のこの踊りの起源は、源平水島合戦の戦死者の霊の弔いとして述べられることが多い。「口説き」(音頭)と太鼓の伴奏に合わせて、複数の踊りが同時に展開する点に特徴があるといわれ、この複数の踊りの調和が見どころの一つとしてあげられる⁵⁾。

白石島の盆踊りが全国的にその名を広めていくのは1920年代後半から1930年代にかけてである。当時は、全国的にも各地で盆踊大会が繰り返

2) 国立公園候補地の本格的な調査が始まった1930年は、瀬戸内海の国立公園候補地は小豆島と屋島のみがその対象であった。現地調査が重ねられる過程で、白石島を含む備讃瀬戸を中心とした範囲へと拡張されたという(西田 1999: 204-206)。

3) 山陽新報(1934年7月15日)。

4) 山陽新報(1934年7月17日)。

5) たとえば、よく踊られる踊りとして、男踊、女踊、笠踊、奴踊、扇踊、月見踊などの踊りがある。ほかにも真影踊、梵天踊などがある。また、この踊りの基本的な踊りとして、ブラブラ踊りという踊りがある。

げられていた時期であった。この踊りは、1928年8月13日から15日まで3日間にわたって行われた新聞社・山陽新報社主催の山陽盆踊大会に参加した。島外行事へのこの踊りの参加は、文字記録においては山陽盆踊大会への出場が最も古い。この大会へ出場した際には、審査委員に「山陽盆踊大会に、この踊りを発見したことは岡山県の誇りだ、全国の盆踊大会でも開かれた場合、わが岡山県の代表として送り出してもはづかしくない」と言わしめるほど、驚きをもって迎え入れられた⁶⁾。盆踊大会で高い評価を受けた踊りは、大会への参加を皮切りに、積極的に島外で上演するようになる。

この盆踊りの知名度を高め全国的なものにしていく契機は、1930年の日本青年館主催の「郷土舞踊と民謡の会」への出場であった。これは、日本青年館の開館に合わせ、1925年に開始された行事であり、各地の郷土芸能を一堂に集めて披露するという形式で行われた⁷⁾。柳田国男や小寺融吉をはじめとする研究者が会の運営にも関わっており、『民俗芸術』などの雑誌の紙面では、その会で上演された芸能に対する合評が行われている⁸⁾。

大会に参加したこの踊りは研究者らからの評価を受けるだけではなかった。山陽新報は、会の様子を「岡山の一行は割れるやうな拍手の声に迎へられて登場先づ船唄に始まり次いで賑やかな盆踊の音頭に一同は精一ぱいに躍り抜き唄ひ抜いて如何にも原始的な郷土芸術振に十二分に發揮し満堂

の大喝采を浴び」たと伝える。このように新聞などの言論メディアで高く評価されることで広くその存在が知れ渡るようになった⁹⁾。

1930年の「郷土舞踊と民謡の会」の概要を記録した小冊子には、白石島の踊りは「船唄と盆をどり」という名で紹介されている（文部省芸術祭執行委員会 1950）。そのほか、1933年に島内の青年団によって作成された小冊子で、その踊りは「白石島舞踊」と表現されていたことから、1933年頃までは現在の「白石踊」という名前はそれほど普及していなかったことが推測できる（白石島男女青年団 1933）。ただし、1934年の山陽新報の新聞記事には「白石踊」という名前が登場している¹⁰⁾。

「白石踊」という名の登場は、郷土芸能という価値体系の中で、あるひとつの郷土芸能として認知され、そのなかである位置を確立していくことをも意味する。そして、それは各地の芸能が一堂に会して競演大会で上演を経験する過程で生じたことであった。白石踊は1930年頃を契機として、新聞社や自治体開催の盆踊大会をはじめとした全国各地の郷土芸能大会における上演を積極的に展開してきた。また、戦後は「白石踊会」（以下、踊会）という名の島民組織を結成して上演活動に出向いてきた¹¹⁾。当初から小寺融吉のような研究者から高く評価されたりする機会も多く、それは戦後以降も変わらず続いた。戦後の象徴的な芸能大会として位置づけられる1950年の文部省主催の芸術祭の郷土芸能大会への出場¹²⁾、1957年に

6) 山陽新報（1928年8月21日）。

7) 明治神宮は各地の青年団の勤労奉仕によって造営されたが、日本青年館は青年団のその労働奉仕を記念して建設された青年修養のための施設である（笹原 1992：48）。郷土舞踊と民謡の会を開催する契機となった青年会館の建設に関すること、およびその建設を可能にした当時の青年団のあり方についても笹原は言及している（笹原 1988：117-131）。

8) 小寺融吉はほかの地域と比較しながら白石島のこの踊りを「見ても踊つても面白い」と高く評している（小寺 1933）。

9) 山陽新報（1930年4月19日）。

10) 山陽新報（1934年7月9日）。

11) この組織は、1948年以降は「白石踊会」という名で踊りの上演を続けてきたが、その前身は「白石踊り回向団」という名であった（白石踊伝承者養成事業テキスト作成委員会 1979：55）ただし、1928年に行われた山陽新報社の盆踊り大会の記事では、団体名は、「回向団」ではなく「小田郡白石組」とあり、広く「回向団」の名が知られていないことがうかがえる（山陽新報 1928年8月18日）。

12) 「郷土舞踊と民謡の会」は、1936年を最後に中止となった。文部省主催の全国郷土芸能大会のことを、当時の文部大臣・天野貞祐は「郷土の芸能が中央で紹介される機会を与え」た会であると紹介している（文部省芸術祭執行委員会 1950）

は岡山県による重要無形文化財指定など、外部評価の高さがそこには示されている（白石踊伝承者養成事業テキスト作成委員会 1979）。

以上、白石踊が新聞社などの言論メディアの力の後押しによる観光業の躍進を背景に、全国的な盆踊りブームを通じて発見され、瀬戸内海の離島のある盆踊り、そして岡山県を代表する踊りとしての地位を獲得した流れについて確認してきた。

岩本によれば、大正初期は、町村を再編成して「国家のための共同体」を構築していく上で、郷土が不可欠な要素として認識されはじめた時期であり、そうした認識がさまざまな施策を実行させることとなり、昭和初期の文部省の郷土教育の展開へと結びついてきたという。岩本は、その具体的施策として、郷土史の編纂あるいは史蹟名勝の保存などをあげる（岩本 1998 b: 23）。

白石島の軌跡は、記録をたどると、岩本が言及するとおりの「国家のための共同体」へ向けた取り組みとしてとらえることも可能である。たとえば、1920年代後半以降、島外でも白石島の盆踊りが広く認知され「白石踊」という名前が付いたこと。あるいは白石踊の名前が定着した頃と時期を同じくして、1934年には白石島が瀬戸内海の国立公園に編入され、1943年には白石島が名勝指定を受けたことなどがあげられよう。また、白石島の名勝指定においては、校長や郵便局長を中心としたいわゆる島の名士たちが1940年頃から「古跡研究会」を立ち上げて名勝指定を目指す運動を開始している。名勝指定をめぐる奔走した古跡研究会のメンバーのなかには、白石踊の活動に関わっていた者が多く含まれていたという（小野・伊藤 2011）。こうした経緯を見ていくと、郷土芸能をめぐる島民の取り組み、あるいは名勝指定をめぐる島民の取り組みは、「国民国家のための共同体」の構築過程と少なからず関係があったのかもしれない。

3-2 地方へのまなざしと文化財指定

白石踊が島外の競演大会へ参加し始めた1930年頃は、ジャパン・ツーリスト・ビューロー（略

称：JTB）が旅行業における手数料収入を伸ばし始めた時期と重なっていた。それから約30年後の1964年、東京オリンピックが開催され、東京・大阪間を結ぶ東海道新幹線が開通した。各地への移動時間の短縮がさらに進み、この時期以降、旅行業は新たな局面を迎えようとしていた。1970年には、国鉄の依頼のもと電通によって演出された「ディスカバージャパン」キャンペーンなども登場し、モータリゼーションへの対抗が生まれた。このキャンペーンは、特定の観光地を推奨するものではないこと、若い女性をターゲットにしたことが特徴としてあげられる。結果的に旅行の目的の多様化が進んでいく。旅行業界で起こったこの変化は、特定地域ではない各地域への社会的な関心の表われを示している。

時期を同じくして白石踊にも変化が現れはじめる。1970年は、日本初の万国博覧会が大阪において開催された年である。東京オリンピックも大阪万博も、交通網の拡充との関係が深い国家的イベントであった。白石踊は、岡山県という地域を代表する文化として、大阪万博の「日本のまつり」と「岡山県の日」という郷土芸能イベントへ参加した。白石踊の出演者は、日本のまつりが100人、岡山県の日が20人にもほり、白石踊としては、かつてない規模の祭りや民俗芸能を集めたイベントへの出場として島民の記憶に刻まれている¹³⁾。

また、万博のような国家規模の競演のみならず、白石島の行政区である笠岡市においても、市内の各地区の盆踊りを一堂に集めて上演する「ふるさとまつり」というイベントが1978年から始まった。白石踊はしばらくの期間続いたこのイベントにも衣装の踊りを着用して毎年参加していた。「ふるさとまつり」の大会実施要綱には「あたたかいふれあいを求めて、年ごとに復活している市内の盆踊りを一堂に集めて共演し、笠岡市民が熱望している住みよいふるさとづくりに寄与すること」が目的であると記載されている。この時期、「ふるさと」意識のめざめとそれに対する働きかけがあったことがその文面から読み取れる。

13) 参加者数には市役所職員も含む。「日本の祭り」は1970年7月28日から7月30日の3日間、「岡山県の日」は1970年5月27日から5月30日の4日間にわたって行われた。

すなわちそれは白石島を超えた地域への統合の力が作用していたともいえよう。

1970年前後に現れた白石踊の変化のひとつは、踊りそのものやその活動、あるいは関連行事などにかかわる記録文書が増えたことである。この頃、白石踊の継承活動を担う踊会は、白石踊の活動の事業報告や収支決算を記録しはじめる。また、1979年には、白石踊会や岡山民俗学会の協力のもと、市の教育委員会が、白石踊の特徴や歴史、あるいは口説き（音頭）や踊り方までも記載した伝承者養成テキストを発行した。こうした記録は、1920年代後半以降に白石島に対する文化的価値が認められ、文化財保護法の後押しによって展開してきたことと無関係ではないことが推測できる。このように踊会を中心として、島民が関わる記録が増えたこともこの時代のひとつの特徴であろう。

また、この時期、島外の団体による白石踊の調査・記録もいくつか行われた。大学などの研究教育機関による調査、テレビをはじめとするメディア、あるいは民間の研究会などによって、団体の取材・記録活動が行われた。たとえば、1958年から民俗芸能の取材をはじめた宝塚歌劇団に設置された「郷土芸能研究会」は、日本民俗芸能の舞台化と記録保存を目的に活動をはじめ、その取材資料を整理して『日本民俗芸能資料目録』を刊行している。白石踊は、日本全国各地の民俗芸能のひとつとしてその目録に記録されている¹⁴⁾。

そのほか笠岡諸島の記録のひとつとして白石島の記録も行われている。1972年6月から10か月間にわたり、笠岡諸島において国庫補助事業の民俗資料緊急調査が行われ、『笠岡諸島の民俗』（岡山県文化財保護協会 1974）が発行されるが、そのなかの「仏教信仰」、「盆踊り」、「年中行事」という項目で白石踊が取り上げられている¹⁵⁾。この民俗資料緊急調査は、全国規模で実施された。白石島は対象外だったが、1962年度から1964年度にわたり、各都道府県につき約30カ所を選んで実施したこの調査の結果は、各々の風俗慣習などが地図上にプロットされた『日本民俗地図』（文

化庁 1969）として刊行されている。

70年代前後以降の白石踊が歩んだ軌跡を記録からまとめておこう。この時期は各地の地域文化に焦点があてられていたが、記録活動は、過疎化による危機感をもとに実施された側面を持つ。記録・収集という取り組みは、比較可能な状態にして並べることが可能にする。この時期に行われた文化財保護法の改定について、岩本は「本来、等価値である文化（＝民俗）に対し、指定制度はそれを格付けし、高いランクのものを選別・優遇する仕組み」となっていると論じる（岩本 1998 a : 223）。1976年に国から重要無形民俗文化財として指定された白石踊に対する外部からの働きかけ

表1 白石踊と白石島に関する年表

年	出来事
1928年	白石踊が山陽新報社主催盆踊り大会へ出場
1930年	白石踊が日本青年館主催「郷土舞踊と民謡の会」へ出場
1934年	瀬戸内海が国立公園に指定
1943年	白石島が名勝に指定
1948年	白石踊会の結成
1950年	白石踊が「全国郷土芸能大会」へ出場
1955年	白石観光協会が衣装の踊りのための衣装を作成
1957年	白石踊が岡山県重要無形文化財に指定
1970年	白石踊が大阪万国博覧会へ出場
1972年	笠岡諸島で民俗資料緊急調査の実施 白石踊が宝塚歌劇団「郷土芸能研究会」の取材を受ける
1976年	白石踊が国の重要無形民俗文化財に指定
1978年	白石踊が笠岡市ふるさとまつり「第一回盆おどり大会」へ出場
1979年	白石踊の伝承者養成テキスト作成
1983年	白石島老人会が位牌を作成
1991年	島民が盆踊りの浴衣を作成
1991年	盆踊りで地区対抗の盆踊大会を実施
1997年	白石島の学校が文部省より「伝統文化教育推進事業」の指定を受ける
1999年	白石踊のビデオを作成
1999年	白石踊鑑賞体験ツアーを開始

（三室 1965、白石踊伝承者養成事業テキスト作成委員会 1979、聞き取り調査をもとに作成）

14) 宝塚歌劇団の郷土芸能研究会は、1972年8月15日に取材に白石島を訪れている（宝塚歌劇団郷土芸能研究会編 1979）。

15) 調査員は岡山県内の学校教員を中心に構成されている。

は、岩本の指摘するような状況を示すものかもしれない。

4 生活の場における踊り

1920年代後半以降、そして1970年前後の白石踊の取り組みは、文化財指定など外からの価値づけと全く無関係ではなかった。それを「伝統文化」の国民文化への統合過程として、担い手たちの働きかけに主体性をみることができるのかもしれない。しかし、担い手たちの白石踊の働きかけをそれだけのものとして判断を直ちに下してよいのだろうか。本節では、国民文化への統合、あるいはそれに伴う主体性の発露への着目などに直ちに結びつけることなく、生活の場において、人びとは地域伝統文化をどのようにとらえようとしてきたのか、そのことについて考えてみたい。

4-1 踊りの衣装

白石踊には、衣装を身に着けて踊る「衣装の踊り」と、衣装を身につけずに踊る「盆踊り」とが存在する。衣装の踊りが、島内での観光イベントあるいは島外の場で、民俗芸能として上演する時の踊りである。これに対し、盆踊りは、浴衣や洋服など自由な服装で踊る盆の時期だけ、島の行事において踊られる。前者の衣装の踊りは、複数ある踊りごとに身につける衣装と踊り手の担当があらかじめ決められている。後者の盆踊りは、衣装の踊りのような決まり事は特になく、島民でなくとも誰でも踊ることが可能である。白石踊は、これら二つの踊りが使い分けられるかのように、伝統文化として継承されてきた点にその特徴がある。それは、外部条件に対する伝統文化の担い手の抗いとして、また継承にあたっての担い手の内発的な実践とも理解することができる。

1991年、島のなかから盆踊りで身につける浴衣を作ろうという動きが現れた。また、同じ時期、島内を複数の地区に分け、盆踊りにおいて踊りを競いあう場が設けられようともしていた¹⁶⁾。浴衣の作成は、白石踊の担い手組織である踊会の

補助を受け、地域の住民が費用を負担するかたちでその提案が実行に移されることになった。踊りに熱心であった島民がデザインをした浴衣は好評で、地区ごとに購入希望者を募ると、300枚もの希望が寄せられたという。当時のことを振り返り、「一家に一枚はあると思う」と述べる人もいたほどであった。今でも、その時の浴衣を着て盆踊りに参加する島民もいるが、踊会では必要がなくなった浴衣を島へのUターン者やIターン者に譲り渡す取り組みを行っている。

もちろん、その浴衣を「衣装」として上演に向くことはなかった。Aさんは、1950年に開催された文部省主催の芸術祭の郷土芸能大会に、笠踊りの担い手として参加したことをきっかけとして白石踊の継承活動に関わるようになった¹⁷⁾。今でも、その時に使用した笠を大事に保管しているAさんは「大会で上演する時の衣装がなかったため、姉に衣装を作成してもらった」と当時を懐かしむように語ってくれた。また、現在でも保管しているその笠は自作したものだという¹⁸⁾。Aさんは後に、白石踊の口説き(音頭)をするようになり、今日では衣装の踊りに欠かせない口説きの名人となった。また、時間があれば海に向かってその練習をしているといい、島民のなかでもよく知られている。何十年ものあいだ衣装の踊りに参加し続けてきたAさんの語りからは、白石踊を価値づけるうえで、衣装がいかに重要であるととらえられているのかがわかる。

観光化による外部からのまなざしが盆踊りにまで注がれようとする時期に島民の発案によってなされた盆踊りの場における浴衣の製作は、島民が外部に対して見せる白石踊の評価がなにによって決定づけられるのかを知ったうえで、価値づけられた踊りの評価を島の内部で位置づけなおそうとする試みでもあった。

4-2 回向踊りの場における意味付け

盆踊りは、毎年盆の時期に行われる。盆踊りの場は公民館前広場であるが、かつてそこが浜であった頃からその場所は変わっていない。雨天の場

16) 2008年11月14日に聞き取り調査。

17) 2008年11月9日に聞き取り調査。

18) 2014年8月6日に聞き取り調査。

合を除いては公民館前広場に口説き（音頭）をとる者が立つ櫓が組み、その傍らに祭壇が設置される。現在の盆踊りの期間は、8月13日から16日までの4日間であるが、そのうち15日は回向踊りの日と定められ、その日は島に唯一ある寺の住職が祭壇の前で読経を行う¹⁹⁾。

回向踊りの際のその祭壇には、果物や缶詰などの供物、故人の遺影と位牌が置かれる。位牌には、「白石島中各々精霊位」と記されており、これは亡くなった島民すべてを対象としたものだという。位牌には、1983年10月、「白石島老人会」によって作られたことが記されている。それが祭壇にいつから置かれたのか、正確な時期は聞き取りによって明らかにすることが出来なかったが、寺や踊会の関係者によると、おそらく位牌が製作されて間もない時期からそこに置かれていたのだろうという²⁰⁾。

このように島民すべてを対象とした位牌が作られ、祭壇に置かれるようになる以前には、回向踊りの会場には、戦没者と思われる戒名が記された掛軸がかけられていたと盆踊りにはほぼ毎年参加しているBさんは記憶しているという²¹⁾。

また山陽新報の新聞記事によると、1939年には戦争で亡くなった白石島出身者のために、島では「供養盆踊」が踊られ、その模様を撮影したテープが新聞社によって島出身の出兵者たちに送られたことが伝えられている²²⁾。戦時体制下の影響もあってか、当時の盆踊りでは戦没者供養という側面が強調されていた。したがって、盆踊りの場で起こった変化—掛軸から位牌へ—は、回向踊りの場が、大戦の戦没者を弔うためのものから、すべての島民を弔いの対象とするそれへと意味づけが変わったことを示しているといえる。

しかし、1933年に島の青年団によって作成された盆踊りを紹介する小冊子には「踊は源平水島

合戦の戦死者を此の島に葬つて、その霊を慰さめたのに始まる〔原文ママ〕とあり、白石踊りの起源は源平合戦にあるとしている（白石島男女青年団1933）。位牌については、ある人は、「島民全てを対象とした位牌は戦前から置いてあった」と言い²³⁾。また、「現在でも掛軸はかけられていると思っていた」と話す住民もいる²⁴⁾。どちらも日ごろから踊りの活動に熱心に取り組んでいる島民である。

このように盆踊りの場に集う人びとが、その場に対しどのような意味づけを行っていたのかを辿ることで、彼らが、島を取り巻く状況に応じながら、その意味づけを固定的にとらえるのではなく、常に修正を行っていることがわかる。

4-3 踊りのマニュアル化

1979年に作成された『白石踊伝承者養成テキスト』には、白石踊の独自性が、「その群舞形式の特異さ」にあり、「それぞれ衣装や所作の異った踊りが一つ音頭に、一つ太鼓に合わせて踊られる〔原文ママ〕」点にあると記されている（白石踊伝承者養成事業テキスト作成委員会1979：22）。白石踊は、唄となる口説き（音頭）と太鼓による演奏のもと、数種類の異なる踊りが踊られ、それらを同時に踊るなかから独特の調和が生じると評される。このような独特な特徴をもち、かつて踊りは、日常生活や踊り場などで自分の気に入った踊り手に習って覚えるものであった。そのことを示すかのように、Cさん宅に保管している大正の元号が入った口説き（音頭）をまとめた本には、現在のテキストのような楽譜は書かれていない。つまり、これは口説き（音頭）が、人から人へと直接伝えられるものであったことを示している²⁵⁾。

白石踊は、このように教える人の個性が表れる

19) 現在は8月16日のみ、盆踊りは別の場所（西の浦）で行われている。

20) 寺への聞きとり調査によると、「祭壇を設けるようになったのは戦没者がでてくるようになってから」だという。また、この頃、島民が持ち寄った戦没者の位牌が置かれることもあったという（2008年10月6日に聞き取り調査）。

21) 2014年5月23日に電話による聞き取り調査。

22) 合同新聞（1939年9月6日）。

23) 2014年5月23日に電話による聞き取り調査。

24) 2014年8月6日に聞き取り調査。

25) 2008年11月14日に聞き取り調査。

踊りでもある。なおかつ踊り手が減少傾向にあったため、文化庁の支援を受けてテキストが作られる運びとなった（白石踊伝承者養成事業テキスト作成委員会 1979）。テキストには、白石島の歴史や白石踊の起源、特徴、唄の歌い方や踊り方などがまとめられている。また、テキストだけでなく、1998年から制作していたビデオが1999年には完成したという²⁶⁾。これらの出来事は、白石踊のマニュアル化の進展としても考えられる。しかし、小学校や中学校など、踊りの伝承のための場に参加するなかで、「白石踊はそもそも個性が出る踊りである」というマニュアル化の動きとは相容れないように思われる言葉を耳にする機会が何度かあった。

盆踊りなどの場においては、しばしば踊り方の違いが語られることがある。それは島民と島外の盆踊りの参加者との間に見られる違いを指摘する語りでもあるが、同じ島民のなかでも昔と現在の踊りが違っていることなどを指す場合のものもある。Dさんは、島外から観光で島を訪れた踊りの参加者の踊りを見て「上手く踊る人もいるが、島の人と比べて何かが違う」と述べる²⁷⁾。また他の島民は、その理由として「手の上げる高さ」や踊りの「所作」などの異なる点をあげる。島外からの参加者も含め、幅広い世代の島民が踊り手になる可能性のある盆踊りの場では、こうした違いの認識は場の分断を引き起こす可能性もある。そこで「白石踊はそもそも個性が出るおどりである」、「そもそも個性の出る踊りだから違うことは問題ではない」という言説によって、踊り手たちがそれぞれの違いを受け入れつつ、踊りの場が維持できるよう折り合いがつけられている。現在も、テキストやビデオを作成するものの、それでもなお、白石踊は個性が出る踊りであるという認識は踊会の活動への参加者のなかで広く共有されている。

5 結語

本稿は、国立公園指定や名勝指定といった観光をめぐる地域の歴史的経緯をふまえつつ、岡山県笠岡市白石島の無形民俗文化財の白石踊が、1920年代後半から現在までの文化財化のプロセスの政治性のなかで、どのように展開してきたのか検討してきた。

白石島は1930年頃の早い時期に、国立公園あるいは名勝の指定など、国家による価値づけによって、近くの市町村、あるいは岡山県から、その存在が認められるようになった。

白石踊の継承プロセスの考察からは、1920年代後半の競演大会への出場をきっかけとし、積極的に島外と様々な関係を取り結びながら、ついには重要無形民俗文化財へと指定されたように、そこには開放性のようなものが見られた。

しかしながら、島民によって経験された場からとらえようとした場合、開放性だけではない側面がみえてくる。開放性を示しながらも、実践の場では「われわれ意識」のようなものへの働きかけが同時に行われていた。そこでいうそれは決して固定的なものではなく、ゆるやかに繋がり、なおかつ持続性を維持しようとする関係性であった。

白石踊は、単純化してみればそれは文化財となった外発的な衣装の踊りと自分たちの生活の場の持続を目指す内発的な盆踊り、つまり外発性と内発性の二重構造のように見える。しかし、4節で見えてきたように、回向踊りの際には、掛け軸が位牌にかわり、対象が戦没者から亡くなった島民全ての弔いへと変化したこと、あるいは源平水島合戦の戦死者の霊を慰めるための踊りが起源であるという語り、それらは盆踊りのなかで併存してきた。また一方で踊りのマニュアル化を受け入れつつも、白石踊りは個性の出る踊りという言説も共有されるという自在さは、単純な外発否定や内発重視とは異なるあり方を示している。

26) ビデオ作成にあたっては、経費を節約するために道具運びを自分たちで行ったり、学校施設を使用したり、多くの島民の協力のもと撮影が行われたという。また、それは白石踊の活動が盛んになった1990年代のことであった。この時期は、白石島の学校が文部省より「伝統文化教育推進事業」の指定を受け、白石踊に関わる取り組みが活発に行われた時期である。

27) 2013年9月13日に聞き取り調査。

島民による白石踊をめぐる実践から見えてくるのは、衣装の踊りという島外を意識した踊りがある一方で、盆踊りに向けて島民のための浴衣を作ろうという働きかけがあったように、白石踊を媒体に、自分たちの生活の場にある社会関係を再び繋ぎ合わせようとするものであった。白石踊を通じた交流の場で見られたのは、違いに焦点化せず、それを受け入れてその場を持続させていこうとする態度であった。それは外発的なさまざまな契機をうまく利用しながら、それを手なずけ、自らの生活の内発性を保持しつづけるあり方といえるだろう。

参考文献

- 文化庁、1969、『日本民俗地図（年中行事1）』文化庁。
 古川彰・松田素二、2003、「観光という選択－観光・環境・地域おこし」古川彰・松田素二編『観光と環境の社会学』新曜社。
 俵木悟、2003、「文化財としての民俗芸能－その経緯と課題－」『藝能史研究』（160）。
 岩本通弥、1998 a、「民俗学と『民俗文化財』とのあいだ－文化財保護法における『民俗』をめぐる問題点」『國學院雑誌』99(11)。
 ———、1998 b、「『民俗』を対象とするから民俗学なのか－なぜ民俗学は『近代』を扱えなくなってしまったのか－」『日本民俗学』（215）。
 関西学院大学地理研究会、1974、『瀬戸内調査シリーズ 8 白石島・馬渡島』関西学院大学地理研究会。
 笠岡市史編さん室編、1996、『笠岡市史 第三巻』笠岡市。
 小寺融吉、1933、「郷土舞踊の會の問答」『旅と傳説』（66）。
 三室清子、1965、「白石踊りの研究－とくに舞踊の音楽的表現について－」『岡山大学教育学部研究集録』（19）。
 文部省藝術祭執行委員会編、1950、『郷土藝能』日本民謡協会。
 森田真也、2007、「『文化』を指定するもの、実践するもの－生活の場における『無形民俗文化財』－」岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館。
 西田正憲、1999、『瀬戸内海の発見』中公新書。
 岡長平、1952、『岡山県の盆踊と民謡』岡山県教育庁社

会教育課。

- 岡山県文化財保護協会編、1974、『笠岡諸島の民俗』岡山県文化財保護協会。
 小野芳朗・伊藤乃理子、2011、「瀬戸内海・白石島と高島の国立公園と名勝指定における郷土宣揚策の構造」『ランドスケープ研究』74(5)。
 大島暁雄、2006、「無形の民俗文化財の保護について－特に、昭和五〇年文化財保護法改正を巡って－」『國學院雑誌』107(3)。
 才津祐美子、1996、「『民俗文化財』創出のディスクール」『待兼山論叢』（30）。
 ———、2006、「『民俗』の『文化遺産』化をめぐる理念と実践のゆくえ」『日本民俗学』（247）。
 笹原亮二、1988、「引き剥がされた現実－『郷土舞踊と民謡の會』を巡る諸相－」船越亮編『共同生活と人間形成：共同生活の教育力を考える』第3・4号、和敬塾教育文化研究所。
 ———、1992、「芸能を巡るもうひとつの『近代』－郷土舞踊と民謡の會の時代」『藝能史研究』（119）。
 ———、1999、「語られる過去－演者が語る三匹獅子舞の歴史－」『民俗芸能研究』（29）。
 白幡洋三郎、1996、『旅行ノススメ』中公新書。
 宝塚歌劇団郷土芸能研究会編、1979、『日本民俗芸能資料目録』宝塚歌劇団。

参考資料

- 『山陽新報』（「盆踊大会審査発表」1928年8月18日）。
 『山陽新報』（「山陽盆踊大會審査員十氏の選評」1928年8月21日）。
 『山陽新報』（「白石島踊一行大喝采を沿ぶ」1930年4月19日）。
 『山陽新報』（「有名な白石踊」1934年7月9日）。
 『山陽新報』（「白石島は島のクイン」1934年7月15日）。
 『山陽新報』（「保存したい白石盆踊り」1934年7月17日）。
 『合同新聞』（「散華勇士を弔ふ白石島の盆踊」1939年9月6日）。
 白石島男女青年団、1933、『白石島舞踊と民謡』。
 白石踊伝承者養成事業テキスト作成委員会、1979、『白石踊伝承者養成テキスト』笠岡市教育委員会。
 白石踊り会、1975、『万国博出演回顧記念アルバム 白石おどり』笠岡市商工観光課。

Designation as Cultural Property and Practices by “Bearers” ——Focusing on the Context of Two Dances——

ABSTRACT

This article considers practices that how local communities interpret traditional dance which gain recognition as cultural properties. A traditional dance called Shiraishi Odori has been designated as a cultural property by the national governmental agency in 1976. This cultural property has features of a tourism resource. On the other hand, the dance has been inherited by the local community in a manner rooted in the context of their everyday lives. It is possible that tourism creates conflicts in the process of inheriting the dance. Therefore, it is necessary to clarify how local communities attempt to deal with external conditions.

Shiraishi Odori has been passed down over the generations on Shiraishijima Island, Okayama Prefecture. Shiraishijima Island is in the Seto Inland Sea. An island designated as a national park and place of scenic beauty, it has accepted the development of tourism. This article considers how the local community attempts to reconcile external conditions with their daily lives.

Key Words: the practices of local community, traditional culture, cultural property